中学生の歴史的見方・考え方に関する一考察

―― 歴史新聞（社説）の分析を通して ――

山　崎　裕　二

Ⅰ　はじめに

本稿のねらいは、中学校社会科歴史的分野の学習を通して、中学生にどのような「歴史的見方・考え方」が育っているかを、生徒が作成した歴史新聞の「社説」を分析することにより、学年別・男女別に明らかにしようとするものである。

ところで、この「歴史的見方・考え方」については、その育成の重要性が指摘されているわりには、用語そのものの明確な概念規定はなく、思考力とする見解(注1)や歴史意識とする見解(注2)など、いろいろである。本来ならば、「歴史的見方・考え方」についてのそれぞれの見解を一つずつ吟味すべきであるが、スペースの都合もあり、省略したい。ここでは、「歴史的見方・考え方」を文字通り素直に受けとめ、「歴史的事象の意義や意味（変化・発展・因果など）を論理的・科学的に考察する方法」と規定して、課題に迫っていこうと思う。

Ⅱ　歴史新聞の作成

先ほど、生徒の作成した歴史新聞の社説の分析を通して、「歴史的見方・考え方」の育ち具合を考察すると述べたが、歴史新聞とはどのようなものであろうか、また歴史新聞における社説とはどのようなものか、以下、歴史新聞の特色および作成方法について述べておきたい。

周知のように、歴史新聞とは、「ある時代や時期を一区切として、その時代の主な出来事を、総合的に日刊紙の形にまとめたもの」であり、生徒自身がその時代に生きた人間となって、過去と現在の両目をもって作成していく(注3)ところに特色があるといわれている。そして、その作成は、生徒の歴史学習に対する興味や関心を高めたり、意欲化をはかったり、総合的な時代認識を把握させるうえで効果があるといわれている。

しかし、この歴史新聞の作成自体、今日では全国津々浦々の学校で行われているというもののその形式や内容は様々であり、一定したものはない。そこで、ここでは、社説の位置づけを明確にする意味も含めて、筆者が授業実践の中で作成させている方法を紹介しておこうと思う。なお、次に示すことがらは、筆者が昭和57年度入学生に対して指示した作成方法の概要である。

(1)　取材範囲　　1年－原始～奈良時代　　2年－原始～江戸時代

(2)　作成時期　　1年－昭和57年度夏休み　2年－昭和58年度夏休み

(3)　新聞規格　　B4版の中質紙（1枚）

(4)　紙面の構成と作成にあたって指示した主な内容と観点

①　トップニュース……「見出し」は読み手の興味をそそるか。記事は正確か。いつ、どこで、だれが、なにを、なんのために、どのようにしたか（5W1H）を要領よくまとめて

いるか。その時代の人間になって述べているか。

② 社説……トップニュースについての社説かどうか。社（または自分）の「主張」が述べられているかどうか。社説の内容が歴史的、客観的にみて妥当か。課題性や問題提起があるかなど。

③ 外電……外電の記事は当時の外国の動きを敏感にとらえたものであり、トップニュース以前の出来事かどうか。要点（５Ｗ１Ｈ）が簡潔におさえられているかどうか。

④ 広告……その時代の人々の生活感覚にふさわしい広告かどうか。目につきやすいかどうかなど。

⑤ 新聞名……トップニュース、社説、外電、広告の各記事の内容から考えて、その新聞に、最もふさわしいタイトルかどうか。

⑥ 構成紙面でトップニュース、社説、外電、広告などのバランスがうまくとれているか。きれいに書かれているかどうか。むだはないかどうかなど。

Ⅲ　歴史新聞および社説の事例

では、上記のような指示にもとづいて作成した歴史新聞の形式や社説の内容はどのようなものであろうか。分析に移る前に、その具体的事例を紹介しておきたい。

1. 歴史新聞の事例

＜事例１＞　　１年　Ｍ・Ｉ女の作品

＜事例２＞　　１年　Ｍ・Ｏ男の作品

＜事例３＞　２年　Ａ・Ｍ男の作品

＜事例４＞　２年　Ｔ・Ｎ女の作品

2.　社説の事例

以下に示す社説は、＜事例１＞ ～ ＜事例４＞の歴史新聞の社説内容の要点を抜粋したものである。

(1)　＜事例１＞の社説　　１年　Ｍ・Ｉ女

＜社説テーマ……「聖武天皇と人々の努力」＞　この度、大仏建立という大事業を成し遂げられた聖武天皇の努力に対し、心からその労をねぎらいたいと思う。人民の平和を願いつつ、さまざまの障害を乗りこえて、開眼会の日を迎えられた聖武天皇の喜びを共によろこびたい。しかし、この日を迎えるまでには、いろいろのことがあった。この大仏を造りあげるには、例え、１日千人の人が働いたとしても４年かかるという。（中略）又、聖武天皇、光明皇后共々に、自ら大仏の座に土を運んで人々をはげましたという説があるが、ここで忘れてならないのは、光明皇后の並々ならぬ、影の力のあったことだ。光明皇后は学問にすぐれ、仏をあつく信じ、情深い人であり、人々の信望（ママ）もあつく、このことは、聖武天皇の心の支えになったことだろう。（下略）

(2)　＜事例２＞の社説　　１年　Ｍ・Ｏ男

＜社説テーマ……「大仏開眼と今後の世の中」＞　今回の大仏開眼で、聖武上皇をはじ

め光明皇后、孝謙天皇の喜びも色々の悪条件の中での大仏建立だったこともあって、一入(ママ)だったことであろう。（中略）こうした、いくつかの苦しみを乗り越えて、昨日、晴れて大仏開眼の式を行ったが、果して、今後、世の中が良くなっていくであろうか。仏教を厚く信仰している聖武天皇は、大仏を高く見上げて、「これで世の中が平和になることだろう」と述べているが、本当に平和になっていくのであろうか。これから先、全国ではやっている病気などは、どのような動きをみせるか。せっかく皆が、ここまで努力してきたことが、このままでは水の泡になってしまうではないか。この大仏開眼を区切りに今後平和が世に訪れることを、ただ望むものである。

(3)　<事例３>の社説　　２年　Ａ・Ｍ男

<社説テーマ……「島原の乱の原因」>　昨年十月に起こった乱が四カ月ぶりに鎮圧された。この乱は一応キリスト教を旗印として起こった乱である。しかし、この一揆の根本的な原因は、松倉氏のあまりにもひどい政治であり、この一揆はそれに対する農民の反抗であることは間違いない。（中略）では、松倉氏はどのような政治をおこなっていたであろうか。1616年、松倉重政は島原に来ると、キリシタンに対して恐しい弾圧を加え始めた。水責め・火あぶり・穴つるし・針さし・竹ノコギリ引きなど、手段を選ばなかった。また彼は、島原の大名になると、四万石ほどにもかかわらず、江戸城の修理などに十万石相当を負担し、幕府の信任を得ようとした。このような大名の下で、暮らしてきた農民が、一揆を起こそうとしたのは当然であろう。（中略）ここで幕府に望みたいことは、宗教的なことは個人の自由にしたらどうかということである。（中略）また、農民支配の仕方ももう一工夫ほしいところだ。米を出せないでいる者に、出せ出せといってもしようがないと思う。今後、幕府もよく考えて政治をしてほしいものだ。

(4)　<事例４>の社説　　２年　Ｔ・Ｎ女

<社説テーマ……「ハンムラビ法典の世界史的意義」>　ハンムラビ法典が完成した。ハンムラビの統一事業は、これでもって完成したといえる。わが国は、エジプト王国と違い多数の民族によって成りたっている。従って、多民族国家である。各民族は、それぞれ個有の歴史・慣習・言語をもつ。このような多民族国家は、それをまとめるための共通の言語・法規が必要であり、それなしでは社会生活は不可能である。ハンムラビは、もっとも影響力のあるアッカド語（バビロニア語）をもって、その法典を編集し、言語上の統一を意図した。今やわが王国にあっては、貴族も平民もまた本国人も外国人も平等になった。（むろん厳密には貴族と平民とは完全に平等でないが）（中略）とにかく、オリエント世界に始めて、法治国家が誕生したのであり、このことは、人類史上画期的なことである。

今後この法が多くの国々に影響を与えることは間違いない。今やバビロンは世界の中心になった。

Ⅳ　社説分析の視点と分析事例

1. 社説分析の視点

歴史新聞を構成する主な項目は、トップニュース、社説、外電、広告の４つであったが、歴史的見方・考え方とのかかわりにおいて、直接の対象になるのは社説である。社説はトップニュースに対しての生徒自身の意見であり、生徒が自分なりの見方・考え方で、これまでの学習で得た知識や能力を駆使して、最も力を入れて書く項目である。したがって、社説には歴史的事象に対するその生徒なりの見方・考え方が生々しく表出されているはずである。よって、このような社説を、何らかの視点によって分析していけば、生徒の歴史的見方・考え方の違いが検出できるものと考える。

そこで、ここでは、吉田貞介氏のイラスト分析の手法を手がかりに、「社説の記述内容がどのような歴史的見方・考え方の論理のもとに述べられているか」(注4)という観点から、次の５つの社説分析の視点を設定した。

(1)　単層型……問題点の指摘などの現状を述べるだけのもの

(2)　二層パラレル型……述べられている内容が二つ以上あるが、それらの間に深い意味関係はなく、単に並列的に述べられているもの

＜例＞昔は豪族の力が強かったが、今は弱くなった、など。

(3)　二層システム型……述べられている内容が二つ以上あり、それらの内容が関連しあって意味をもたせ系統的に述べられているもの

＜例＞現状→原因、現状→対策、原因→結果、条件→事象

(4)　三層型……述べられている内容が三層からなっているもの

＜例＞現状→原因→対策、原因→結果→解釈など。

(5)　多層型……述べられている内容が多岐にわたり、事象の構造的な把握や総合判断、さらには将来に対する予測などがなされているもの

なお、これら５つのタイプのうち、最も高次な歴史的見方・考え方は(5)の多層型であり、最も低次なものは、(1)の単層型である。したがって、歴史的見方・考え方を高次なものから順にいえば、(5)→(4)→(3)→(2)→(1)ということになる。

2. 社説分析の事例

社説の記述内容を論理性によって分析していった場合、どのような記述が上記の(1)～(5)のどのタイプに属するのであろうか。以下、Ⅲの２で示した＜事例１＞ ～ ＜事例４＞について社

説分析の具体例を示しておきたい。

(1) ＜事例１＞は、トップニュース「奈良の都に大仏建立 － 聖武天皇の祈り － 開眼会開かる」に対しての社説である。内容は、①大仏の開眼会という大事業が無事終了したこと ②それまで聖武天皇は苦労を重ねて完成にこぎつけたこと ③大仏造営にあたって光明皇后の陰の力が大きかったこと、などが述べられている。述べられている内容は二つ以上あるが、それぞれが並列的で、事象相互間の深い意味関係はない。したがって、二層パラレル型と判別できる。

(2) ＜事例２＞は、トップニュース「大仏開眼 － 僧侶１万人が参加 － インドの僧が眼をかき入れる」に対しての社説である。内容は、①大仏開眼までの過程は悪条件が重なったので（大仏の完成は）聖武上皇にとって喜びはひとしおだったこと ②大仏を造営したのはよいが病気の流行している世の中が本当に平和になるか、などである。現状と今後の予測について述べられている。よって、二層システム型に属するものと考えられる。

(3) ＜事例３＞は、トップニュース「原城陥る － 一揆方三万余皆殺し － 兵12万でようやく鎮圧」の社説である。内容は、①島原の乱の本質は農民一揆であること ②その農民一揆の原因は領主松倉氏の悪政にあること ③今後幕府に望みたいことは宗教の自由化と農民支配の工夫であること などである。社説テーマは、「島原の乱の原因」となっているが、現状 － 原因 － 対策が論理的に述べられている。したがって、三層型に属するものと考えられる。

(4) ＜事例４＞は、トップニュース「ハンムラビ法典布告さる － 世紀の偉業282条 － 4千行に及ぶ堂々の法典」に対する社説である。内容は、①バビロニア王国にハンムラビ法典が完成したこと ②多民族国家では法規がなければ不可能であること ③ハンムラビ法典の完成は言語によるバビロニアの統一でもあること ④オリエント世界で人類最初の法治国家が完成したこと ⑤法治国家の成立は以後の世界の国々に影響をもたらすであろうこと などが論理的・構造的に述べられている。したがって、多層型とみなしてもさしつかえないだろう。

Ⅴ 社説の分析 結果と考察

1. 社説分析の結果

前章で示した方法により１年生（164例）２年生（168例）の社説を分析した。

そして、その結果をタイプ毎に学年別・男女別に整理してまとめたのが、右の図表である。

社説分析の結果

	1年生		2年生	
単層型	男 37人（44.6%）	女 49人（60.4%）	男 12人（14.5%）	女 15人（17.6%）
	86人（52.4%）		27人（16.9%）	
二層パラレル型	男 23人（27.7%）	女 16人（19.8%）	男 24人（28.9%）	女 30人（35.3%）
	39人（23.8%）		54人（32.1%）	
二層システム型	男 18人（21.7%）	女 11人（13.6%）	男 28人（33.7%）	女 22人（25.9%）
	29人（17.7%）		50人（29.8%）	
三層型	男 3人（3.6%）	女 3人（3.7%）	男 8人（9.6%）	女 13人（15.3%）
	6人（3.7%）		21人（12.5%）	
多層型	男 2人（2.4%）	女 2人（2.5%）	男 11人（13.3%）	女 5人（5.9%）
	4人（2.4%）		16人（9.5%）	
計	男 83人（100%）	女 81人（100%）	男 83人（100%）	女 85人（100%）
	164人（100%）		168人（100%）	

2. 結果の考察

以下、中学生の歴史的見方・考え方について、学年別・男女別にはどのような特色がみられるか、ということについて、社説の分析結果をもとに考察しておきたい。

(1) 学年別の考察

まず、1年生より述べる。1年生の分析結果によれば、タイプ別に見た場合、単層型が、52.4％、二層パラレル型が23.8％、二層システム型が17.7％、三層型が3.7％、多層型が2.4％ということになる。三層型・多層型という高次な歴史的見方・考え方をしている生徒が存在することにまず驚くが、特色的なことは単層型が約半分を占めていることである。また、単層型・二層パラレル型をあわせると、約4分の3の生徒がこの二つのタイプに属することになる。これらは、いずれも自分の思ったこと、考えたことを感想文的に述べたものであり、（注5）科学的に筋道をたてて述べたものではない。したがって、1年生の夏休みまでの段階では、大部分の生徒が歴史的事象の意義や意味（変化・発展・因果など）の把握を指標に考察をすすめていないものと考えることができよう。この理由としては、いろいろ考えられるが、態度や能力的な面からいえば、次の二点をあげることができよう。

① 一般に、この時期の生徒は歴史理解の態度が個人道徳面を重視する傾向にあるために、歴史的事象の因果や発展を歴史的に考察しようとする態度がまだ十分ではないこと。（注6）

② 歴史的事象を考察するのに必要な思考力が、まだ十分育っていないこと。

次に、2年生をタイプ別にみた場合、単層型が16.9％、二層パラレル型が32.1％、二層システム型が29.8％、三層型が12.5％、多層型が9.5％となる。1年生の場合と比較して考えれば、単層型が大幅に減少し、その他の各タイプが増加しているのがわかる。これは、1年生の夏休みから2年生の夏休みまでの1年間に、歴史的事象の因果や発展を科学的に考察しようとする態度や歴史的な思考力が少しずつ育ってきたためと思われる。しかし、三層型や多層型のような高次な歴史的見方・考え方のできる生徒は、まだ全体の5分の1程度である。この理由としては、歴史的事象に対する構造的・発展的思考力がまだ未発達のためであるからと思われる。（注7）

(2) 男女別の考察

1年生の分析結果によれば、タイプ別に見た場合、単層型は男子が44.6％、女子が60.5％とやや女子の割合が高くなっている。また、二層パラレル型・二層システム型は幾分男子の割合が高く、三層型・多層型は男女とも同じ割合となっている。また、2年生では単層型・二層パラレル型・三層型は女子の方が幾分割合が高く、二層システム型・多層型は逆に男子の方が割合が高くなっている。

このようなことから考えれば、1年生では、男子が女子に比べて、幾分、歴史的事象の意味を科学的に考察しようとしている生徒の割合が高いようであるが、それほど目立った相違はない。また、2年生についても、1年生の場合とほぼ同様で、男女間の目立った違いはみられない。

Ⅵ　おわりに

これまで、中学生の歴史的見方・考え方について、歴史新聞の社説を手がかりに考えてみた。その結果をまとめれば、次の(1)～(3)のことがいえるのではなかろうか。

(1)　中学校１年生の夏休み段階では、大部分の生徒は歴史的事象の意義や意味（変化・発展・因果）を科学的な考察方法でとらえようとする態度や能力が十分ではないこと。

(2)　２年生の夏休み段階では、歴史的事象の意義や意味を科学的な考察方法でとらえようとする態度が芽ばえ、またそのための能力（思考力）も少しずつ育ってくること。

(3)　男子と女子で考えた場合、1･2年生とも幾分男子が歴史的事象の意義や意味をより科学的な方法でとらえようとしているが、それほど目立った違いは見られないこと。

ところで、上記の(1)～(3)の結論は、あくまでも、「社説を分析した限りでは」という条件つきのものであり、これらが一般化できるかどうかということについては、アンケートや面接法などによって違った角度からも把握しなければならないだろうし、また、歴史的思考力の発達や態度面からの傍証も必要だろう。

なお、本稿で研究の対象としたのは、２年生の夏休みの時点までのものである。生徒の歴史的見方・考え方が、以後どのように育っていったか追跡調査も必要であるし、育て方の研究も大切である。今後、先ほどのことがらも含めて、一歩一歩研究を深めていこうと思う。

<注>

(1)　高山博之「歴史学習における歴史的思考力の系統」（尾鍋輝彦・豊田武・平田嘉三編著『歴史教育学事典』ぎょうせい）

(2)　佐藤照雄『歴史学習指導の視点と方法』119ページ　東京法令出版

(3)　安部登「歴史学習における概括的認識について」（島根大学教育学部社会科教育研究室『社会科研究』２）

(4)　「イメージ形成を重視した歴史学習」（水越敏行編『社会科の授業評価』明治図書）

(5)　昭和５５年度に同様の手法でおこなった1年生歴史新聞・社説の分析によれば、単層型・二層パラレル型に属する割合は約７０％、二層システム型・三層型・多層型に属する割合は約３０％であった。（今谷順重・山崎裕二「中学校歴史的分野『古代天皇制統一国家の形成過程』の授業(Ⅱ)」『神戸大学教育学部研究集録』第６８集）

(6)　日本社会科教育研究会『歴史意識の研究』第一学習社

(7)　一般には、発展的思考は高校２年生頃から発達するといわれている。（前掲『歴史意識の研究』）